令和６年度　全国学力・学習状況調査の調査結果を踏まえた

「伊賀市学力向上プロジェクト委員会」からの提言

学力向上に向けた今後の取組について

１．さらなる授業改善への取組

○　主体的・対話的で深い学びを意識した言語活動の充実

学校は、すべての学年においてキャリア教育を意識し、発達段階に応じて児童生徒の興味関心を生かした自主的、自発的な学習がうながされるよう工夫する。そして、すべての教科において学習指導要領の趣旨・内容を理解した教材研究を行う。授業の中では、学習課題に対し、自分の考えをしっかりもたせ、仲間と考えを出し合い、考えを深めさせる授業づくりを行う。また、児童生徒が自ら学習課題や学習活動を選択する機会を設けるなど工夫し、課題解決に取り組む学習活動を積極的に行う。

言語活動については、国語科を要とするすべての教科において、記録、要約、説明、論述、話し合いなどを重視し充実を図る。あわせて、自分の考えや意見を言葉や文章で相手に伝える指導を日常的に継続して取り組む。特に外国語（英語）においては、授業の中でスピーチやプレゼンテーションなど自分の意見や考えを外国語で表現する機会を増やし、英語力を向上させていく。

○　めあてとふりかえり（自己評価）の徹底と質的向上

指導者は、授業でめあてを示すことで、児童生徒に授業の見通しを持たせ、学習意欲の向上につなげる。そうすることによって、授業の焦点化を図ることができる。めあては、児童生徒を主語にし、児童生徒が自分でふりかえりができる言葉で提示する。そして、学習したことを振り返る活動を行い、めあてが達成できたか否かを児童生徒に自己評価させる。授業で分かったことや疑問として残ったことなどを文章化したり、適用問題等を行ったりすることで、学習における自己調整能力向上を図り、主体的に学ぶ態度の育成、学力の定着につなげる。指導者は、そのために、ねらいが完結できるような１時間の学習活動をタイムマネジメントする。

指導者は、この一連の学習活動を通して児童生徒の変容や課題を把握し、適切な評価をフィードバックするとともに、自身の授業改善に活かすようにする。

○　GIGA スクール構想に基づく一人一台端末の効果的な活用

学校は、児童生徒の成長段階に応じて、一人一台端末をはじめ ICT 機器を積極的かつ効果的に活用し一人一人の特性や学習の進度に応じた「個別最適な学び」と、互いのよい点や可能性を生かしながら一緒に学ぶ「協働的な学び」の充実に効果を上げているか確認しながら、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていく。特に一人一台端末については、課題解決に取り組む学習活動の中で、考えをまとめ、発表・表現する場面で積極的に活用を進める。そして、今後のさらなる活用に活かすために、課題や資料の効果的な提示や、一人一人の思考を深める活動などに一人一台端末を積極的に活用し、その活用データを蓄積していく。

○　カリキュラムマネジメントを意識した取り組みの充実

学校は、教科横断的な視点で教育課程を編成し直し、実施・評価して改善を図る取組のＰＤＣＡサイクルを確立させる。

○　授業のユニバーサルデザイン化

学校は、特別な支援が必要な児童生徒や日本語指導の必要な児童生徒にとってわかる授業は、すべての児童生徒にとってもわかる授業であると捉え、すべての児童生徒にわかりやすい授業づくりを行う。「めあて」「ふりかえり」の実施は、授業のユニバーサルデザイン化の重要な要素である。

○　理解度の把握と学習内容の確実な定着

学校は、学-Viva!!セット等を利用して、児童生徒が学習内容をどれだけ理解しているかを把握し、その結果から学習内容の確実な定着に向けて取組を進める。

○　管理職による教員の授業へのアドバイスの実施

管理職は、授業中の教室で児童生徒の学習の状況等を把握し、それぞれの教員に授業力向上に向けた指導・助言を行う。

２．家庭学習の充実

学校は、学習課題を適切に与えることにより、すべての児童生徒に充実した家庭学習の習慣をつけさせる。それぞれの児童生徒の生活実態を把握するところから始め、家庭学習の課題提示やタブレットの持ち帰りによる家庭学習の方法等について学校として基本方針をつくることが必要である。特に学校は、児童生徒の授業への理解を深め、主体的な学びにつながるよう、タブレットを利用した家庭学習の取組を進めていく。

また、指導者が、予習・復習・自主学習等の具体的な学習方法や学習内容の例を提示することで、充実した家庭学習へとつなげていく。家庭での時間のつかい方や家庭学習の内容に対して指導や評価をすることにより、児童生徒の学習意欲が高まったり、定着が進んだりする等、児童生徒自身が家庭学習の成果を感じられるように工夫する。

３．小中の連携、保護者・地域との連携

小中学校が成果や課題を共有するなど、連携をとりながら小中９年間を通して児童生徒の学習内容の理解・定着を図っていく。また、学習規律・生活規律面での系統性を図るよう努める。

また、「いがっ子　～家庭学習・読書のすすめ～」等を活用して、保護者や地域と連携を図り、家庭学習や読書の状況などを共有する。家庭学習の時間と関わりの大きい携帯電話やスマートフォン等でのゲームや SNS、動画視聴をする時間に依然として課題が見られるため、ルールや約束を作り、生活時間を調整するよう働きかける。

授業改善を核にした取組を行う。そのために、学校内の全ての教職員が共通認識をもち、学校長のリーダーシップのもと学校全体で取り組むことを確認する。